

『源流茶話』注釈(二)

中村修也*

Annotation of 'Genryu-Sawa' 源流茶話 Vol.2

Shuya NAKAMURA

2 茶会の濫觴

足利義満

一 茶を賞翫有し八、足利將軍鹿苑義満公の比に専ら成といへとも、只賞味御自愛の風情のニ也、

【大意】

茶を賞翫することは、足利將軍・鹿苑義満公の時に始まつたというが、それはただ義満公が自分だけで個人的に楽しんだというにすぎない。

【語釈】

足利將軍鹿苑義満公：室町幕府三代將軍。延文三年（一三五八）

～ 応永十五年（一四〇八）。幼名春王、法名道義、法号鹿苑院。

父は二代將軍義詮。貞治六年（一三六七）父の死により將軍職を

継ぐ。永徳二年（一三八二）左大臣に就任、翌年には准三后の宣

下を受け、南北朝の合一も果たす。応永元年（一三九四）將軍を

辞し、太政大臣となる。一四〇二年明の建文帝から日本國王に冊封され、勘合貿易を始める。義堂周信に師事し中国文化を導入。応永四年に北山第を建設し、北山文化の基を築く。息子義教は六代將軍となり、唐物の蒐集を始め、それは義教の次男・八代將軍義政に引き継がれ、東山御物となる。

【解説】

ここでは足利義満の個人的な茶の賞翫として叙述されているが、それは次の義政の茶の前段階としての設定のためであることは明らか。喫茶の風習は、鎌倉時代末期の金沢貞顕の書状などによって、かなり活発であったことが知られている。たとえば貞顕が上洛する摂津親鑿の送別会を開くために、京都にいる息子顕助に出した書状（武将編三一九号）に「新茶大切候、先日給候者はやみなのみうしないて候、寺中第一の新茶、少分拝領候者、悦入候」とあり、鎌倉武士が茶を好み、大事な会では茶が必要とされたことがわかる。

また『太平記』にもバサラ大名で名高い佐々木導誉が大規模な闘茶会を開いたことが「都二八佐々木佐渡判官入道々誉ヲ始トシテ在京ノ大名、衆ヲ結テ茶ノ会ヲ始メ、日々寄合活計ヲ尽スニ」と表現されている。この闘茶は武士だけではなく、寺院・公家の世界にも広がりをもてる。『祇園執行日記』康永二年（一三四三）九月五日条には「巡立茶始之、良沙汰之」と当番制の闘茶の様子がみられ、これは『師守記』には貞治二年（一三六三）に「雲脚茶」とみえるものと同じであり、『看聞御記』応永二十三年（一四一六）二月二十日条に「俄有御茶会、三位・重有朝臣・長資朝臣・寿蔵主等候、自今可為順事各被結番」とある茶会に引き継がれるものである。つ

* なかむらしゅうや 文教大学教育学部学校教育課程

まり、義満の時代以前から茶会は盛んであり、以後も鬪茶のかたちで喫茶は盛んであり、個人的な賞翫ということではできない。

ここでは義政に茶の湯の創始者としての地位を設定し、その前段階の義満はまだ普及に関与しなかったという設定を自己流に叙述しているに過ぎない。

足利義政の茶の湯創始

一 茶湯の濫觴八、後土御門院文明の比、南都称名寺之邊、珠光とて閑人有り、酬恩院（庵）一休和尚ニ参禅して、教外の旨を悟り、圓悟禪師之墨蹟を法信ニ賜りしを、丈室ニ掛て、香華を供し、炉裏に湯を煮て、同好之友引拙・宗悟・宗陳之徒を招きて、茶談の交りを結べり、其交り、興を塵外によすれ共、禮にして和し、和すれども禮を失八す、おのつからにして法をなせり、時に慈照院義政公其風流を聞し召れ、珠光を召て、茶道を御尋有に、清淨禮和之趣を申上られければ、甚夕御心にかなり、此道國家に流布せば、世法のたすけとも成べしと御感心有り、能阿弥・藝阿弥・相阿弥之徒に仰て、古故實を考へ、眞行臺子之法、茶具の品々を御撰有しより、貴人の御翫とも成て、諸國に流布し、次て大内家・今川家・織田家別而豊臣秀吉公に至り、利休に仰て、古法の過不及を御改正有しより、作法宜にかなり、上三公候（侯）より工商にいたるまで、流布申事二候、

【大意】

茶の湯の始まりは、後土御門院の御世、文明年間（一四六九～一四八七）である。奈良の称名寺のあたりに、珠光という隱者がいた。彼は酬恩庵の一休和尚に参禅し、禅の主旨を悟り、その悟境の向上

のしるしとして圓悟克勤の墨蹟を授与された。

珠光はその墨蹟を方丈に掛け、仏に香と花を供え、炉でお湯を沸かし、同好の友人である鳥居引拙・十四屋宗悟・宗陳といった人を招き、茶の湯の交流をなしていた。その交わりは興趣を世俗の外に求めていたが、儀礼を以て親和し、親しくとも儀礼を失わず、自然と作法が成立していった。

その頃、將軍義政公はその風雅な遊びを耳にして、珠光を呼び寄せて、茶道について尋ねられた。珠光が、「心身を清め儀礼を以て人と接する」という茶道の要諦を申上げたところ、その主旨が義政公の考えにかなない、「茶道を日本中に広めれば俗世間の作法の参考になるであろう」と感心された。

そこで、義政公が、能阿弥・藝阿弥・相阿弥の三阿弥に命じて、古の儀式礼法を勸案して、（眞行草のうち）眞・行の台子の作法や茶道具の品々を選定した結果、茶の湯が身分の高い人々の遊びとなり、日本各地に広まったのである。次第に大内家・今川家・織田家・に広まり、ことに豊臣秀吉公に至っては、千利休に命じて、古い作法の過不足を改正されてからは、茶の湯の作法が適正なものとなり、上は公家から下は一般の工・商業者に至るまで、茶の湯が普及することとなったのである。

【語釈】

南都称名寺：奈良市菖蒲池町所在の浄土宗寺院。文永二年（一二二六五）に興福寺の学侶が草創し、洛西三鈷寺の澄忍上人を迎えて念佛道場としたと伝える。幕末までは興福寺の別院で興北院と称し、奈良町民の菩提所として栄えた。珠光が若い頃ここで修行し、晩年には草庵を建てたと伝えるが不詳。

酬恩院：酬恩庵。京都府綴喜郡田辺町大字新に所在する臨済宗寺院。

もとは大応国師が創建した妙勝禅寺を、康正二年（一四五六）一休宗純が再興した。一休は晩年をここに住し、ここで没した。

一休和尚：一休宗純。応永元年（一三九四）～文明十三年（一四八

一）。臨済宗大徳寺派の僧。自号狂雲子。後小松天皇の落胤。六歳で京都安国寺に入り、その後、天竜寺、建仁寺に移る。十六歳で西金寺の謙翁宗為に参禅し、二十一歳で華叟宗曇に入門。二十五歳で公案を透過して「一休」号を授けられる。師華叟が没し、兄弟子養叟が法嗣となると、その俗性を批判して薪の妙勝寺や堺を転々とした。養叟派には反発しながらも大徳寺の荒廃には心を痛め、堺町衆の協力を得て復興に尽力した。一休の禅が在家的・人間的であったため、連歌師宗長・山崎宗鑑、能の金春禅竹など多くの芸術家たちが参禅している。『山上宗二記』には圓悟の墨蹟について「是八昔、珠光ノ一休和尚ヨリ得玉フ墨蹟ナリ、墨蹟掛初也」とあり、抛頭巾花入の説明に、珠光が死去の際に「宗珠ニ譲リ、忌日ニ八圓悟ノ墨蹟ヲ掛ケ、抛頭巾ニ火クツヲ入、茶ノ湯ヲ手向ヨ」と遺言したと伝える。これにより、珠光が一休に参禅し、一休より圓悟の墨蹟を譲り受け、更に宗珠に伝授した経緯が知られる。

円悟禅師：圓悟克勤。一〇六三年～一一三五年。宋代の臨済宗の僧

字は無著。四川省彭州出身。北宋徽宗皇帝から仏果禅師、南宋の高宗帝から圓悟禅師の号を贈られた。最初、臨済宗黄竜派の晦堂祖心に参禅し、ついで楊岐派の五祖法演に参じてその法を嗣いだ。彼の最大の業績は「禅門第一の書」といわれる『碧巖録』を著述したことである。珠光が一休に参禅し、圓悟の墨蹟を譲り受け、茶席に掛けたのが、茶席に墨蹟を掛けた最初であるといわれ、彼

の書は茶人に重視された。

引拙：鳥居引拙。生没年不詳。室町時代の茶人。『山上宗二記』に

珠光の弟子として記され、「茶の湯の数奇者は古今の名人と云う。

珠光並びに引拙・紹鷗也」とあって、武野紹鷗と並ぶ名人と評価

されている。さらに「引拙は名人也。茄子ならしげ、其の外州色

計所持す」とあり、名物道具を三十以上所持していたようである。

「珠光一紙目録」には「引拙の時迄は、珠光の風体也。其の後、

紹鷗悉く改め追加せ令め畢んぬ」ともあり、引拙の茶の湯は、珠

光のそれを忠実に引き継いだものであったようである。

宗悟：十四屋宗伍。生没年不詳。京都の町衆。松本氏。号は卒休齋・

休齋。近江国出身で京都下京に住した。『南方録』に「宗易の物

語に、珠光の弟子、宗陳・宗悟と云人あり、紹鷗は此二人に茶湯

稽古修行ありし也」とあり、珠光のわび茶が、宗陳・宗悟を経て

利休に伝えられたことを伝える。とくに五陽六陰の曲尺割の秘事

は、宗悟だけが珠光より伝授され、それが紹鷗を経て利休に伝え

られたとされる。『分類草人木』には、宗悟と宗珠を常に対照的

な茶の湯を行う人物として描いており、宗陳はあるいは宗珠の誤

りかとも考えられる。そうすると紹鷗は珠光跡目たる宗珠と独創

的な宗悟の両方の茶の湯を学んだことになる。ただし、『山上宗

二記』は「下京宗悟、茶の湯すきたる人也。但し、目きかぬなり。

小道具数多所持。善き道具無し」と厳しく非難している。大徳寺

江隠宗願の賛語のある宗悟画像が伝存し、それから宗悟が古嶽宗

巨に参禅したことがわかる。

宗陳：『南方録』『覚書』に利休の伝聞として、「宗易の物がたりに、

珠光の弟子、宗陳・宗悟と云人あり。紹鷗はこの二人に茶湯稽古

修行ありし也」とあり、武野紹鷗の茶の師匠として宗陳・宗悟の

二人の名前が挙げられている。宗悟はおそらく十四屋宗悟のことで間違いないが、宗陳なる人物は茶道史上、他のどこにも見当たらない。宗陳の「陳」の字のくずしと「珠」のくずしは似通っていることを考えると、宗陳は「宗珠」の誤りとも考えられる。宗珠ならば珠光の跡目として『二水記』などにも「数奇之上手」「数奇之張本」として記録され、下京に居住した「宗珠」に想定できる。

慈照院義政公：足利義政。永享八年（一四三六）～延徳二年（一四九〇）。室町幕府八代将軍。六代義教の二男。幼名三寅。もと義成と称する。宝徳元年（一四四九）將軍職に就く。寛正五年（一四七三）弟の義尋を還俗させ、義視と名乗らせ家督を継がせるが、翌年、日野富子に義尚が生まれ、応仁の乱の原因を生じさせた。文明十四年（一四八二）東山山荘の造営に着手し、その座敷飾りを相阿弥などの同朋衆が手がけた。庭造りなども河原者に任せるなど身分を越えた文化の吸収を行った。彼の周辺には東山文化が生まれ、彼の時代までに集められた道具は一般に東山御物と呼ばれるようになる。『山上宗二記』では、能阿弥を介して珠光から茶の湯の楽しさを学び、東山山荘で専ら茶の湯を楽しんだという伝説が書かれている。山上宗二の時代には、東山御物が茶の湯の唐物道具の最高峰であったために、茶の湯の最初の庇護者に擬せられたのである。

能阿弥：応永四年（一三九七）～文明三年（一四七一）。足利将軍家の同朋衆。姓は中尾、名は真能、号は春鷗齋。唐物奉行として舶来品の鑑定・管理・座敷飾りを担当した。応仁二年（一四八八）に息子周健の冥福のために描いた「白衣観音図」が唯一の実作として伝わる。『御物御画目録』『室町殿行幸御飾記』『君台観左右

帳記』の撰述者に擬せられている。『山上宗二記』の冒頭に足利義政が東山山荘に隠居した後、能阿弥を召して「何か珍敷御遊在るべきか」と尋ねたところ、「南都称名寺に珠光と申すもの御座候。此の道に尤深く、三十歳已来、茶の湯に身を抛ち、又は孔子の道をも学びたるものにて候」と茶の湯と珠光を紹介した文章がみえる。ところが東山山荘は能阿弥没後の作事であり、年代がわず、この話は宗二の創作と考えられている。むしろ能阿弥の才能は連歌の方に記録が多い。飯尾宗祇の連歌選集『竹林抄』に宗祇七賢の一人として能阿弥があげられており、一七二句が収められている。また『新撰菟玖波集』にも「公方同朋 能阿法師 四十三」とあり、四十三句が採用されている。室町末期には、連歌会で喫茶が行われることも少なくなかった。宗珠なども連歌会において数寄を興行している。それゆえ連歌と茶の湯の関係は深く、かつ能阿弥が茶道具として最高の東山御物の選定者であることから、茶の湯の仲介者としての役割を荷わされたのかもしれない。

藝阿弥：永享三年（一四三一）～文明十七年（一四八五）。同朋衆。姓は中尾、名は真藝、号は学叟。父は能阿弥。将軍家に近侍して、唐物奉行として仕えた。連歌にも精通し、その作品は『新撰菟玖波集』に収録されている。水墨画にも長じ、文明十二年作の「観瀑図」が伝存する。

相阿弥：？～大永五年（一五二五）。同朋衆。姓は中尾、名は真相、号は鑑岳・松雪齋。祖父能阿弥・父藝阿弥とともに三阿弥と称された。また三代にわたる座敷飾りの規式書ともいえる『君台観左右帳記』をまとめている。大永三年には十代将軍義植のために『御飾記』を記したといわれる。連歌もよくし、殿中連歌会で活躍し、「宗匠」と称された。

眞行臺子之法：台子点前を眞・行・草の三段階に分けた、その眞の台子と行の台子点前のことを指すのであろうが、台子点前が本来眞・行・草の三段階に分かれていたかどうかは疑問である。『角川茶道大事典』は「台子」の綱目で、『草人木』『台子の沙汰』に能阿弥と珠光による台子飾りの法式が種々記されていることを指摘した後、「義政時代に発達した台子は、その後、武野紹鷗を経て、千利休によって、台子による茶湯の法式が定まつたわけである」（鈴木恵子）と記すが、紹鷗や利休による台子点前の記録はほとんど見当たらない。そもそも台子についても、南浦紹明が文永四年（一一六七）宋より帰朝の際、台子および皆具一式を持ち帰り、筑前国崇福寺の什物としたところ、後にこの台子が京都・大徳寺に送られ、さらに天竜寺の夢想疎石に渡り、点茶に用いて茶式が定められたというが、これは江戸後期の『嬉遊笑覧』（天保元年刊）に記載された内容である。比較的古い『草人木』でも寛永三年（一六二六）の板行である。それゆえ同時代史料は皆無に等しい状況にある。比較的信頼度の高い『山上宗二記』（天正十六〜十八年成立）にも台子の茶の記述は少ない。確たるものは次の二箇所である。「茶湯者覚悟十体」に「手前」の説明として、「薄茶を建てて専一也。是を眞の茶と云つ。世間に眞の茶を濃茶と云つは非也。濃茶の建て様は、手前にも身もかまわず、茶のかたまらぬように、いきのぬけぬけように建ててが習也。其の外、台子四つ組、並びに小壺・肩衝、此の中に在り」とあり、「茶湯者之伝」に「堺津田宗達は台子の荘り一世楽しむ。名物州種所持す」とあるのがそれである。一方、永禄七年（一五六四）成立と伝える『分類草人木』には「台子、附長板・小板・屏風」の項目があり、台子の七飾・五飾・三飾をはじめ、種々の台子飾りに関

する記述がある。

大内家：大内氏と茶の出会い、米原正義氏によると大内義弘の時代に遡る（『戦国武将と茶の湯』淡交社、一九八六年）。さらに本書の「大内家」とは大内政弘の時代をさすとして、「政弘は室町幕府同朋衆能阿弥から、『君台観左右帳記』を贈られたというが年代が合わず、能阿弥の子芸阿弥が整理して贈ったかもしれない。芸阿弥と大内氏の交流は『親元日記』によって知られるからである」（同書）と述べる。政弘の息子義興には明確な茶の湯の記録がみえる。『元長卿記』永正十一年（一五一四）四月十八日条に在京中の義興が、三時知恩寺の檜性内親王から茶会に招待された記事がみえる。また義興の息子義隆については『大内義隆記』（天文二十一年成立）に「国毛治リテ山口内ノ悦八、ワレサキクサノ殿作り、三葉四葉二咲花ノ、柱花瓶ニイケ置テ、茶ノ湯座敷四畳半、三畳敷二次ノ間ヲ、ツクラヌ人ハナカリケリ」という記述があり、国内で草庵茶室が盛んに造作された様子が窺える。大内氏は日明貿易で巨富を築き、山口に小京都を現出せしめ、応仁の乱でも多くの文人・貴族を山口に迎えた。地方にあつて文化都市であつた。しかも一時期とはいえ堺を支配地としていたことを考えると、数寄の茶の湯文化が流行していたこともうなづける。

今川家：今川家も大内家に劣らず名門である。『今川記』に「御所が絶えれば吉良が継ぎ、吉良が絶えれば今川が継ぐ」と記されたほどの格式のある家系であつた。今川義元は天下を狙いながら、桶狭間で織田信長の奇襲を受け、あえなく果てるが、その義元の茶の湯について『高白斎記』に「重テ御振舞於数奇屋ノ座御茶御酒太刀被下」と記されている。今川家には数寄屋が設けられていたことがわかる。山上宗二の『茶器名物集』（天正十六年成立）

には、玉潤筆の遠浦帰帆図の説明に「其昔は連歌師宗長所持、昔雪齋所持、其後今川義元所持」と書かれている。雪齋は義元の相談役であり、今川家の長老であった。さらに弘治三年四月八日の津田宗達の茶会に、今川家の重臣関口刑部・岡辺太郎左衛門が招かれている(宗達自会記)。この時、宗達は「だいす 平釜 桶がうし、柄杓立」と四飾りの台子の茶で迎えている。このことから今川家では台子の茶が普及していたことがわかる。

織田家：織田家は信長の印象が強すぎるが、父信秀の時代から茶の湯が盛んであった。信秀も山市晴嵐の大軸や篠香炉を所持していたし(松屋名物集)、信長の守役・平手政秀も京都の公家に認められる当世一流の文化人であった。信長は名物狩りを行い、足利將軍家に代わって天下の名物を蒐集しようとしたことは有名である。また堺衆の今井宗久・津田宗及・千宗易を茶堂として遇し、妙覚寺茶会・相国寺茶会を催したように茶好きでもあった。その家臣の佐久間父子・滝川一益なども茶の湯にまつわる逸話が多い。押しなべて織田軍団は茶の湯好きといえよう。

豊臣秀吉公：天文六年(一五三七)～慶長三年(一五九八)。戦国武將。尾張国中村出身。父は織田信秀の足輕木下弥右衛門。はじめ木下藤吉郎を称し、のち羽柴氏、さらに豊臣氏に改姓。織田信長に仕え、本能寺の変後、山崎の合戦に明智光秀をやぶり、天下人への道を進んだ。天正四年(一五七六)七月一日に安土城普請の功により、信長から牧谿筆の月の絵を与えられ茶の湯を許可された(信長公記)。これ以降、秀吉の茶の湯活動が始まり、同時に堺町衆との交流も盛んになる。ことに秀吉は千利休を優遇し、大友宗麟の手紙に「内々の儀は宗易、公儀の事は宰相(秀長)存じ候」と記述されるほど、秀吉政権内で重視した。また秀吉自身

茶の湯を好み、大坂城大茶会・北野大茶湯などの大規模な茶会を催したり、禁裏茶会による権威付け、黄金茶室の創作など、積極的な茶の湯活動を行っている。

【解説】

ここでは喫茶ではなく、茶の湯の始まりについて記述されている。要約すると、足利義政が珠光の風聞を聞いて招聘し、茶の湯について質問したところ得心するに至り、同朋衆である能阿弥一家に台子点前・茶道具の選定を命じたため、諸国に流布し、大内家をはじめとする戦国大名の間でも流行し、豊臣秀吉の時代に千利休が改正を加えて、茶の湯の作法が完成した、ということになる。

おそらくそれまでの諸説を換骨奪胎して簡略にまとめたのであるが、そのために誤謬にも目を瞑っている箇所がいくつか生じている。たとえば、珠光の同好の友として「引拙・宗悟・宗陳」の三人を挙げているが、他の茶書ではこれら三人は珠光の弟子として扱われている。『山上宗二記』には、「京・堺に珠光の弟子多し。大抵聞き及ぶ衆、松本・篠・道提・善法・古市播州・西福院・引拙」とあり、または「珠光の跡目宗珠・宗悟・善好・藤田・宗宅・紹滴・紹鷗也」とある。この記載から、天正年間、まさに利休全盛の頃には、引拙・宗珠・宗悟は珠光の弟子と考えられていたことがわかる。

「宗陳」は語釈に記したように、『南方録』成立の段階で「宗珠」を間違えて「宗陳」とし、それを他の茶書も、この『源流茶話』も踏襲していると考えるのがもっとも穏当と思われる。その理由として「珠」と「陳」のくずし字の類似についてはすでに指摘したとおりだが、もう一つの理由としては、宗陳なる人物は同時代の史料にまったく現れないばかりか、『南方録』が成立する以前の史料にも

登場しないからである。逆の言い方をすれば、『南方録』成立以後にどこからか登場した実在性の稀薄な人物といえよう。

それに反して、宗珠は『二水記』、『宗長日記』などの公家や連歌師の日記に明記され、当時の「数奇の張本」とまで称される人物で、珠光の後継者と想定して問題の人物である。詳細については拙論「茶人論¹² 宗珠」(『茶の湯』第三五一号、二〇〇三年五月)を参照いただきたいが、彼を珠光の後継者と認める根拠は次の二点に尽きる。一つは真珠庵における一休宗純の年忌奉加帳の記載である。珠光が延徳三(一四九一)年の十回忌に百文、明応二年(一四九三)の十三回忌に一貫文奉加しているが、永正七年(一五二〇)の三十三回忌には珠光の名前はなく、代わって宗珠が五百文の奉加を行っている。珠光は文龜二年(一五〇二)五月十五日に没しているから、一休の三十三回忌には珠光に代わって跡目の宗珠が奉加したと考えられる。もう一点は屋敷の同一性である。鹿苑院の仁如集梵(一四八三〜一五七四)の『縷氷集』に、下京四条に所在した宗珠の午松庵は「茶湯数奇の宗朱の居する所」と記され、「古織公伝書」(一六四七〜五二年成立)にも「京都珠光屋敷は四条北のかわにて、松の木の間へ見ゆるなり」とある。つまり、宗珠は珠光屋敷を譲り受け、そこで数奇を行っていたと考えられるのである。

宗悟は十四屋宗悟と考えて間違いないだろう。宗悟は宗珠とともに『分類草人木』にしばしば登場する。彼ら二人が、珠光の弟子かどうかは別として、珠光の後の時代の茶人として活躍した人物であることはたしかと思われる。『分類草人木』は原本が残らず、かつ写本も現在は所在不明で、史料的に問題があるが、内容的には珠光の後の時期の茶の湯を記している。問題は残るものの、今は『茶道』全集本の奥書「永禄七年甲子季春初吉 真松齋春溪」に従っておき

たい。ただし宗珠の屋敷が京都の下京四条にあったように、宗悟も京都の町衆であり、二人ともに活動の場は京都であった。それゆえ珠光が応仁・文明の乱を避けて南都称名寺に「閑人」として閑居していた頃に、「茶談の交わりを結ぶ」ことは不可能であった。

次に足利義政・珠光・能阿弥の関係であるが、『山上宗二記』の記述は、義政が新しい遊興を尋ねたところ、能阿弥の紹介で珠光が召され、茶の湯を開陳するという展開であったが、ここでは義政が伝聞によって珠光を直接呼び寄せて茶の湯について話を聞き、実行作業を能阿弥一家に命じたという段取りに変更されている。いずれにしても文明三年(一四七一)八月になくなった能阿弥には関係のない話である。これも、事実に基いた記述というよりは、『山上宗二記』の記述をアレンジしたものと考えるべきであろう。

ただし「諸国に流布し」以下の記述は事実在即している。大内家・今川家・織田家の三家があげられているが、そのほかに戦国大名として朝倉氏・島津氏なども茶の湯を行っていた記録が見出せる。利休の世に登場する以前から、茶の湯は各地の戦国武将、公家の間でも盛んに行われている。それゆえ利休が秀吉政権下において、さまざまな作法の改正や整理を試みたことは間違いないであろうが、それによって「上三公候(侯)より工商にいたるまで、流布申事二候」というのは言いすぎであろう。公家世界・上級武士世界では、室町末期には茶の湯はある程度浸透していた。逆に利休以降でも織部・遠州の時代は大名茶の時代であり、まだ庶民にまで茶の湯が普及したとはいえない。むしろ庶民に茶の湯が普及するのは、中間教授層といわれる町の師匠が多く現れてくる元禄期頃からであり、まさに『源流茶話』が書かれる少し前の時代の様相とみるべきであろう。

3 茶の湯の目的と伝来

問、茶之由來、茶會之濫觴八承候、茶道之趣、傳來之次第、諸流之ワかれ候事八いかに候や、

答、珠光之本意、茶道八法を世法に則り、趣八禪によりて、清淨禮和を旨とせられ候得とも、善政公御賞翫候て、唐・日本の器軸を撰せ給へ八、其弊、琺瑯之翫興、風流の遊筵に似たり、其後、堺之住武野紹鷗其道を慕ひ、珠光の弟子宗陳・宗悟に乞て傳受を得たり、しかれとも、茶具多ク八唐・やまとの琺瑯にして、求めがたきにより、佗をたすけて、茶具の品々を作意し、行草之法をワかち被申候へば、同好之徒、其風に靡きて、茶法大ニ世上に流布し、珠光の後中興の宗匠となれり、同左海に、千ノ利休いまた田中与四郎たりし時より、紹鷗にしたがひて、茶道の奥義を盡し、古來之過不及を糺されしより、清淨正直之道、禮和質朴の法、相備八つて、茶道大ニ熟し、大に成れり、此故に、珠光を茶駟とし、紹鷗を中興とし、利休を大成之法駟とあふぎ申事二候、茶法大成の源は、皆利休よりながれ出候へども、後世諸流とワかれ候事八、惣して茶をすける人、貴賤境界の不同、あるひ八(符箋「素質の」)勝劣、また八時節の機宜によりて、好も又異也、たとへ八善政公八貴人之御境界なれば、料味器軸も善美を盡し給ふ、紹鷗も賤しからねば、名器をも所持候へとも、利休八一向珠光之意により、茶湯之風情八佗たるに有りと覺語悟し、茶室としつらひ、露地のかまへもひとへに幽閑を趣とし、中露地の扉も猿戸をつられ候、古織・遠州も利休の風を仰かれ候へども、共にそこばくの領主なれば、古織八中くゞり、遠州は中門をかまへられたり、又、千ノ宗旦八佗なれば、す戸或は閑竹を置いて、只おの境界のまゝにふるま八れ候、しかるに不案内之人

八、織部流八中くゞり、遠州流八中門、宗旦流八す戸・猿戸などいひて、流によりか八り有様に心へられ、富人も、宗旦流とて佗の風情し、佗人も遠州のなかれとて、うる八しくあしら八れ候事、皆ナ茶道にく八しからさる故にて候、

【大意】

お尋ねします。茶の由来や茶会の始まりについてはお聞きしてわかりましたが、茶道の趣旨や伝来のしかた、また諸流派に分かれた経緯などは、どのようになっているのですか。

お答えします。珠光の本意は、茶道というものは作法を世の中の規則に則つて定め、精神は禪に依拠し、清淨礼和(清らかな心で礼儀正しく和を尊ぶ精神)を第一とする、というものでした。ところが足利義政公が茶の湯を賞翫するに際して、中国や日本の道具の名品を選ばせて楽しんだために、弊害が生じて、珍しい道具を喜び遊ぶ傾向となり、それはにぎやかな風流遊びの遊宴のようになってしまいました。

その後、堺に住む武野紹鷗が茶の湯を慕い、珠光の弟子の宗陳・宗悟に教えを乞い、茶の湯の伝授を得ました。ところが茶道具の多くは中国や国内の道具の中でも稀少な道具が中心だったので、一般の人にはなかなか入手することができませんでした。そこで紹鷗が貧しいわび茶人のために、茶道具をさまざまに工夫して、正式な茶をくずした行・草の茶の作法を広めたところ、同好の人たちが紹鷗の法式を受け入れて、紹鷗式の茶の湯が世の中に大いに広まり、ついに紹鷗は珠光の後の中興の宗匠となったのです。

同じ堺に千利休もいました。利休は、まだ田中与四郎と名乗っていた頃から紹鷗のもとで茶道の修行をしており、奥義を知り尽くし、

古来よりの作法の過不足を矯正されました。そのおかげで茶の湯は清浄で正直な精神と礼和質朴の作法の両方を兼ね備えることができ、大いに発展し、大成することができたのです。それゆえ、珠光を茶祖、紹鷗を中興、利休を大成の法祖として仰ぎ奉ることになったのです。

このように茶法大成の源流はすべて利休から流れ出したのですが、後世になると諸流派に分かれてしまいました。その原因は、そもそも茶を好む人に、貴賤の境界があつて同じ身分ではなかったこと、それに茶の湯の素質に優劣があつたこと、季節々々で良いと感じる好みもまた人によって違つたことなどがあげられましょう。たとえば、足利義政公などは貴人の最高位にいますから、茶会に出ず料理や道具・軸なども美味・最高級品を尽くそうとします。紹鷗などもそれほど低い身の上ではないので、名物道具も所持していました。ところが利休は、珠光の教えを第一と考えていたので、「茶の湯の風情はわびた境地にあり」と覚悟して、茶室の飾りも、露地の結構ももっぱら幽閑を旨としてしつらえており、中露地の扉なども薄板を打ちつけただけの猿戸を釣っていました。

古田織部と小堀遠州も利休の茶風を慕っていたのですが、もともとが共にそれなりの領主でしたから、露地に織部は中潜りを遠州は中門を設けました。一方、千宗旦は貧しかったので、簀戸が関竹を置いて中露地の扉としました。これはただ自分の身分境遇のままに工夫しただけのことです。ところが茶の湯に不案内な人は、織部流は中潜り、遠州流は中門、宗旦流は簀戸・猿戸が特徴であるなどと勝手な解釈をして、流派によって変化があると思ひ込み、経済的に豊かな人も、自分は宗旦流だからといって貧相な風情を凝らし、逆に貧しい人が、自分は遠州の流れを汲んでいるからといって、(無

理をして)立派に取り合わせようとします。これらはみな茶道というものがわかつていないから起きることなのです。

【語釈】

清浄禮和：茶道の要諦。清らかで礼儀正しく和を尊ぶ意。

行草之法：3 「足利義政の茶の湯創始」で「眞行臺子之法」とあるのに対する用語か。「行」が重複しているのが気になるが、後の茶祖・中興・大成という三段階説と勘案すると、珠光の茶を眞、紹鷗の茶を行、利休の茶を草と考えているのであろうか。ただし、利休に関しては台子の茶の改正者としての地位も認めている。眞・行・草という三段階による説明は、おそらく書道における楷書・行書・草書からの発想であるが、これはけつして上・中・下という三等級の意味ではない。この眞・行・草の考え方は茶の湯だけでなく、広く芸道に応用されている。基本は、眞の厳正に対して草の自由があり、行はその中間に位置した。ただし茶の湯では『南方録』によると、最初に台子の茶の中に眞・行・草があつたことになる。ところがここでは珠光時代の台子の茶の眞に対して利休の草庵(わび)茶の草を対置させ、過渡期の紹鷗の中興期の茶を行と位置づけている。そもそも伝承的には珠光自身が「わび茶」の創始者であるはずなのに、眞・行・草理論を明確にさせるために、いつの間にか眞の茶の人物に割り振られている。これは眞・行・草理論のための理論であり、次第に実態からはなれ、利休を中心にした理論構築を行つていった結果といえよう。

中興の宗匠：武野紹鷗を中興の祖とする考えは、この後の文章に、「珠光を茶祖とし、紹鷗を中興とし、利休を大成之法祖とあふぎ申事二候」とあるのに対応している。これも利休を茶の湯の大成

者とする論理から生み出されたものと考えて大過なからう。

田中与四郎…与四郎は利休の名。利休の祖父は田中道悦といい、父は田中与兵衛といった。姓を田中としたことから、千利休(宗易)の本名として田中与四郎を記している。「千利休伝記」によると、「利休先祖之儀者代々足利公方家二而御同朋二而御座候由先祖ヨリ田中氏二而御座候、就中、利休祖父八田中千阿弥と申候而東山公方慈照院義政公之御同朋二而御座候、(中略)千阿弥発心致し泉州堺江閑居仕候、其子与兵衛八田中之名字を改メ父之名ノ千を取り苗字ニ致し、千与兵衛と申候而堺之今市町二而商家一罷成候、其子千与四郎と申候而今市町二而商売仕候所茶道ヲ好キ候」という伝承を伝えている。利休の祖父が足利義政の同朋衆であつたという確たる史料はなく、むしろ創作された家伝と見るほうが無難である。ただし、この記事は田中姓から千姓に代わつた経緯を説明する役割を担っており、その意味では、千家がもとは田中姓であつたことは疑いあるまい。

佗…「わび茶」という用語を文化形態の一種、あるいは美意識の一種として使うことがあるが、ここでは経済的に貧しいことを意味する。中世文芸の美意識として「冷・凍・寂・枯」があげられるが、ここには「佗」は含まれない。本文の内容も、高価な道具を買えない「佗」であり、裕福な大名に対する「佗」とあり、貧窮というほどではないが、一般庶民層で、贅沢な高級品が買えるほどではない人々を意味する。『山上宗二記』においても茶の湯者を「目利にて、茶の湯も上手、数奇の師匠をして世を渡る」者と規定して、その中でも、「一物も持たず、胸の覚悟一、手柄一、此の三箇条の調いたるを佗数奇」と定めている。「一物も持たず」というのは貧窮の象徴であり、これに対して「唐物所持し、目利

も茶の湯も上手、此の三箇も調い、一道に志深きは、名人と云う也」とする。もし精神性や美意識だけならば、名物道具・唐物道具を持つていても佗数奇と呼んでもよいわけであるが、「一物も持たず」と限定しているところが、美意識の問題でないことを表している。そして、「一物も持たず」が条件となると、紹鷗・利休などは「佗茶人」ではないことになる。事実、山上宗二は、名物道具を三十以上所持する紹鷗を「名人」と規定している。ことに宗二は道具を重視しており、『山上宗二記』も一名「茶器名物集」と称されたほどである。それゆえ同書「茶湯者覚悟十体」にも、「善き道具持つ事」が掲げられており、「又十体」の第一に「目明」が挙げられ「茶の湯道具は云うに及ばず、何にても、見るほどの物、善悪を見分け、人の詭物をしおらしく数奇に入りて始むる事專一也」と述べる。道具の鑑識眼が、かえつて美の善悪を見分ける能力に通じるという考え方である。それは「茶湯者之伝」にもあらわれており、ここで取り上げた人物は粟田口善法を除いてすべて道具所持者であり、名人が多い。佗は一人もいなく、善法ですら佗の範疇にいれていない。ただし末尾に「茶の湯名人に成りて後は、道具一種さえあれば、佗数奇するが專一也」と紹鷗が常に引用した古人の言葉を引用している。ここでの「佗数奇」は、裕福でありながら名物を所持し楽しんだ果ての、ただ一物を楽しむかたちの茶の湯としての「佗数奇」であり、多少の美的意識が含まれていることを感じる。

中露地…露地は、一重露地から二重露地、三重露地へと庭の広さにしたがつて拡大されていった。この三重露地は、外露地・中露地・内露地によって構成されており、中露地には中腰掛や砂雪隠が設けられている。

猿戸：薄板を横に打ちつけた堅柱と堅椽を上下に少しずつ突き出した戸で、戸締りのため猿を設けたもの。

古織：古田織部。天文十二年（一五四三）～慶長二十年（一六一五）六月十一日。安土桃山時代の武将。美濃国出身。父は重定。名は左介・景安・重然。天正十三年に従五位下織部正に叙せられたとされるが、最晩年の自筆書状に「織部助」と自署しており、織部正就任の一次史料は発見されていない。織田信長の家臣となり、本能寺の変後、秀吉に仕え、山城国西岡に三万五千石を与えられたといわれる。天正十二年十月十五日の秀吉茶会に初めて「古田左介」の名が現れる（天王寺屋会記）。千利休とも茶を楽しんだことが利休の書状にみえ、天正十八年六月二十日付の利休書簡「武蔵鎧の文」は署名。同十九年二月十三日、秀吉に蟄居を命じられて堺へ下る利休を細川三斎とともに淀の泊で見送っている。織部は利休没後も、利休のなみだの文を掛けて茶会を催したり、利休作の泪の茶杓の筒に窓をあけ位牌代わりに日夜拝したとも伝える。慶長四年三月六日吉野において、堺・京の町衆や小堀遠州らと花見の会を開いており、「利休妄魂」額字の荷い茶屋を出している。二代將軍徳川秀忠は織部の茶を愛し、慶長十五年には江戸で茶の指南を受け、織部は「数奇者之随一」と称され、天下一の茶匠としての地位を確立した。しかし慶長十九年の大坂冬の陣では、陣中で茶杓の竹を探して負傷する事件があり、夏の陣では織部の家臣木村宗善の謀反が発覚し、織部は切腹を命ぜられ一族は滅亡した。

遠州：小堀遠州。天正四年（一五七九）～正保四年（一六四七）。江戸初期の大名。名は作助・正一（政一）。号は大有宗甫。父は正次。幕府が経営した数多くの重要な建造物の作事奉行を務め、

禁裡・仙洞御所・二条城・江戸城内山里などの建造に関与、初期徳川幕府の重要人物の一人となる。茶の湯は古田織部に師事し、終生師匠と尊敬した。彼の身近な茶人たちには遠州流の茶も教えしたが、公的には織部の茶を伝えた。利休・織部・遠州という茶系が、武家茶道の正系と考えられるようになるに当たって、遠州の果たした役割はまことに大きかった。同時代の千宗旦が清巖宗謂の敵しい禅風に直面して千家流の基を固めたのに対して、遠州が同じ大徳寺でも穏やかに広い心を禅として保証した春屋宗園に師事したことが、その後、千家の茶と遠州の茶の差異を微妙に分けた。

中ぐり：外露地と内露地との境に設けられる中門の一種。

中門：二重露地や三重露地のような複数構成の露地において、各々の露地の間の出口に設けられた門。

千宗旦：天正六年（一五七八）～万治元年（一六五八）。千家三代目。父は利休の後妻宗恩の連子の少庵。利休切腹後、少庵が京で千家を茶家として再興し、その後を継いだ。字は元伯、道号は元叔、別号に咄々斎・咄斎・不審庵・今日庵。十一歳で大徳寺三玄院に入り、春屋宗園の喝食となる。慶長五年（一六〇〇）家督を相続する（千家系譜）。同十三年に松屋久重を招き本格的な茶会活動を始める（松屋会記）。「乞食宗旦」と称されるように、その生活は貧窮を極めたようであるが、大名家への出仕はなかった。その反面、息子たちの就職活動には熱心であったことが、その書状から知られている。次男宗守・三男宗左・四男宗室がそれぞれ武者小路・表・裏の三千家の初代となる。

【解説】

質問事項は三つある。まず一つ目が「茶道の趣」、二つ目が「伝来の次第」、そして三つ目が「諸流の分かれ」である。

第一の茶の湯の目的については、冒頭で珠光の本意と言い直して、それは「清浄禮和」にあると答える。ところが、利休の改正についても、「清浄正直之道、禮和質朴の法、相備八つて、茶道大ニ熟し、大に成れり」と述べる。利休が道と法に分けて兼備した「清浄正直」「禮和質朴」の二つの熟語は頭二字を繋ぎ合わせると、珠光の「清浄禮和」となり、両者は同じことを趣旨としている。つまり、『源流茶話』は、茶の湯の趣旨においても利休を源流としたがっているが、本来ならば珠光の教えにおいてすでに趣旨の源流は確立されていることになる。ただしこれは史実とは関係のない、著述論理の話であることを忘れてはならない。

伝来の問題は、現在通説となっている、珠光・紹鷗・利休という流れを示している。珠光を茶祖、紹鷗を中興、利休を大成と明確に位置づけたのは、あるいは本書が嚆矢かもしれない。本書に先行する『茶話指月集』（元禄十四年板行）には、「本朝、茶礼の行るること尚し。贈相国喜山公、真能か伝を得たまひしよりこのかた、珠光・紹鷗に委く、利休に大成するものなりし」とあり、三者の流れは記すが、それぞれを位置づけることはしていない。さらに先行する『南方録』（元禄三年成立）には、

宗易の物がたりに、珠光の弟子、宗陳・宗悟と云人あり。紹鷗はこの二人に茶湯稽古修行ありしなり。（中略）宗易は与四郎とて十七歳の時より専ら茶をこのみ、かの道陳にけいこせらる。道陳の引合にて紹鷗の弟子になられしなり。

とあり、たんに茶の湯修行の師匠・弟子関係を示すのみで、茶道史

上の位置づけはやはりない。同書に付随する「岐路弁疑」（元禄十七年成立か）には、

凡点茶の一道、普広院、慈照院の両公、好事に長じ、この時専敵重の茶式行れしより、能弥、珠光の流、伝々して紹鷗、利休に至り、露地草庵の清規は、鷗休の族煉に出て、世に流布せること、今また贅するに及ばず。

とある。これも流れのみの記述である。

諸流の分裂については、織部流・遠州流・宗旦流の三流が取り上げられている。しかし本書の成立した元禄十四年の時点では、宗民流・庸軒流・石州流・上田宗箇流・松尾流・有楽流・宗和流など、その活動を明確にしつつあつたはずである。これら諸流を挙げていないのは、敷内流としては、意識の上で同格あるいはそれ以下の流派を俎上にあげることが潔しとしなかつたためであろう。翻つて考えれば、源流たる利休を除けば、織部・遠州・宗旦の三人は、敷内竹心にとつて大きな存在であつたということを意味する。

そして織部が中潜りを、遠州が中門を、宗旦が簀戸を工夫したのは、それを流派の特徴とするためだつたのではなく、単に大名と貧乏な町人という身分や身代の差が現れたに過ぎないと主張する。そして裕福な人が他のしつらいをすることを、「茶道に委しくないからである」と批判している。この論法でゆくと、利休の茶の湯とは、身分に応じた道具・しつらいを認めることになる。このことは、「わび茶」といわれるものと一見矛盾するようであるが、実は正しい。たとえば利休自身の茶を考えればすぐわかることであるが、彼が粗末な道具や、みすばらしい茶室を使ったかという点、そういう記録はない。また名物も所持していたし、名物の斡旋・仲介もしている。四畳半茶室を二畳敷や一畳半敷にすることは、けつして経済

的に安く上げるためではなく、空間構成の工夫である。草庵茶室も、貧乏でそうするのではなく、豪華な邸宅の中に独立家屋で、茶の湯だけのために設けるといふ贅沢である。その意味でも、利休の茶はあくまで「数寄」であって、「佗茶」ではない。

もう一つ問題がある。それは宗旦の茶を宗旦流と呼んでいることである。宗旦の父少庵が、利休とは血縁関係がないとはいえ、実子道安が堺に立ち戻った以上、京で利休の茶を継承したのは少庵・宗旦父子に間違いない。義理とはいえ、彼ら父子はれっきとした利休流茶道の継承者である。本来、宗旦の茶の湯は利休流と呼ばれてしかるべきであろう。

ところが竹心はあえて宗旦流と呼ぶ。竹心だけでなく、『槐記』という言行録の中で、近衛家屬も宗旦流という表現を使用している。

「宗旦流」なる表現は一般性のあるものだったのである。これはなぜであろうか。一つには少庵が茶の湯を業として家を再興した時点では、道安が堺に健在で、家業ではないが茶の湯を行っていたので、利休流を名乗ることができなかった。また、時期的にも、流といった流派茶道の時代でもなかった。そのうえ道安だけでなく、織部・三斎をはじめとして、利休から直接茶の湯を学んだ武将たちが存命であり、彼らの存在も利休流を標榜するのに障害となったであろう。

そして、流という命名はまさに第三者的な名づけ方であることから、各自が織部流・遠州流と名乗ったのではなく、周囲から言い始めた可能性がある。そうすると宗旦の茶は「宗旦流」としか名づけようがなくなる。おそらく宗旦の時代には、まだ家元制による継承論理が明確でない故、利休から許可されたわけではないので、勝手に利休流を名乗るわけにもいかなかったのではなからうか。